

I C T街づくり推進会議 地域懇談会@北海道 議事要旨

1. 日時

平成26年7月15日（火） 16：30～17：45

2. 場所

北見市役所 端野総合支所 大会議室

3. 出席者

(1) I C T街づくり推進会議構成員

岡座長、石原構成員

(2) I C T街づくり推進会議普及展開WG構成員

石塚構成員、神竹構成員、桑津構成員、柴垣構成員、庄子構成員、関構成員、辻田構成員、細川構成員、武藤構成員

(3) 北海道北見市における実証プロジェクト関係者

櫻田北見市長、八谷北見市総務部長防災対策・危機管理担当部長、阿部北見市総務部防災対策・危機管理室長、辻（一社）北見工業技術センター専務理事、布施氏（北見医療福祉情報連携協議会）、川村北見工業大学教授、有田北見工業大学教授

(4) 総務省

藤川総務大臣政務官、杉浦北海道総合通信局長（司会）、小笠原情報通信政策課長

4. 議事

(1) 北海道北見市におけるI C T街づくり推進事業の取組等について

(2) 意見交換

5. 議事概要

(1) 北海道北見市におけるI C T街づくり推進事業の取組等について

櫻田北見市長より、資料1に基づき説明が行われた。

(2) 意見交換

主な発言は以下のとおり。

【藤川総務大臣政務官】

○北まるn e tの患者登録を推進する上での課題は何か。また、医療機関が

持つ情報について、個人情報保護面での課題もあると思うが、実証実験を進める上での市長の思い、可能性や課題をお聞きしたい。

- 北海道は道路の維持管理に大きな予算が必要となると思うが、計測に伴う予算措置をどうしていくのか。財政計画がについてご意見をお伺いしたい。
- 皆さんの意見を全国に周知していく際、地域情報としてローカルメディアがどういう形で北見市の捉え方を評価して地域の共通概念として動いているのか。目に見えないところの手当てをすることが、首長や行政の大切な仕事だと思う。

【櫻田北見市長】

- 今までマイナスで捉えていたことを、ICTを活用して、プラスに変えていくことができると考える。
- 1市3町が合併した新しい北見市の中で、旧町の気象状況について聞かれても行政職員が全くわからなかった。そこで、テレビ回線でそれぞれの自治区と簡単な会議ができるようにし、今ではICTを活用して、膨大なお金を使用しなくても、旧町の状況について確認ができるようになった。
- 道路の維持・補修には、膨大な経費がかかる。道路維持管理システムで、適切な情報をキャッチし数値化できれば、予算措置の順番を決めることができる。橋や建物の老朽化を数値化し、データで把握することは行政として必要。災害防止のため補修する順番を決めるためには、数値化が必要だと考える。

【川村教授】

- ICT事業を財政化できるかが大きな課題。それには、費用対効果を示すことができるかがポイント。また、笹子トンネル事故以来、地方自治体で社会基盤の劣化状態をしっかりと把握する仕組みになっている。
- 道路維持管理システムのポイントは、省力化と省コスト化にある。データを取り、診断、調査、記録を行い、データベースを作成するなど、マネジメントサイクルが重要視されている。路面の平坦性の状況がどう変化しているか、データを定期的にとって、劣化状況のモデルを作成することで、一番お金がかからないシステムで修繕できるということがわかる。
- 最も高価なのがレーザー変位計であるが、当システムではコストのかからない加速度計を使用している。加速度計は1個10万円以下で購入が可能。GPSも安価である。また、アンプリファイアというAD変換をする機械は非常に安価で、知識があれば分解して作り直せるようなシステムである。
- 一番大きな問題になっているPMSを日本でどうやって確立していくかと

いう話がある。世界では1970年代にカナダで確立したものだが、それが浸透するに当たっては、出資元が納得する必要がある、財務面で説得するには、費用対効果の定量化とデータの蓄積が何より重要だと考えている。

○安価なシステムで、しかも12万人ぐらいの地方自治体レベルでデータを取得しているケースはおそらく日本で初めてだと思う。北見市でやっていたもので、実際にどれだけ削減できたかというデータが出ると、一気に普及する可能性があると思う。

○救急医療の現場や精密機械を運ぶ事業者等には道路の平坦性に係る情報のニーズがあり、フロントランナーとして、北見市から発信できればよいと考えている。

【櫻田北見市長】

○北まるnetの課題は医療に貢献すること。地元医師会の先生方から、行政でも電子カルテを整理できないかという話があり、スタートした。

○おくすり手帳の電子化に取り組みたい。おくすり手帳と救急システムが連携すれば、緊急時に医療関係者が閲覧し、適切な処置ができる。しかし、個人情報保護の観点もあり進んでいない。

○歯科データを乳幼児期から就学前、就学期とつなげれば、大切なデータになり、予防医学に発展させることができると考える。

○これらは医療関係者の方々からの提案だが、まだまだ課題がある。

【石原構成員】

○今回のプロジェクトのシステムは、共通プラットフォームを作成し、そこに幾つかの部品をつけ、汎用的に使えるような構成をとっている。汎用的に広がる可能性において、この取り組みは意義があると感じた。

○プロジェクトの成功の鍵は、首長の熱意、参画意識、持続的な粘りにある。

○日本の医療機関は横のつながりが弱い。このプロジェクトを通じて医療機関が協力関係を持ち、データの交換等を行うことは有益だと感じた。その際、個人情報保護や医療業界の問題もあるが、モデルケースを作成し、ノウハウを全国に発信することが重要だと思う。

○総務省からの補助金がなくなった後も自立的な取組ができるかどうか、北見市の産業振興や雇用創出はそれにかかっている。若者が残るかどうかも重要。

【櫻田北見市長】

○北見市を含め、様々な分野においてICTを上手に活用しカバーできる可

能性がある。

- 今後、本当に日本の繁栄があるのかと考えたとき、地方都市が挑戦をしていかなければ日本全体のこれからの未来はないと感じている。

【神竹構成員】

- 道路の平坦性の測定について、市道も国道も北見市が行っているのか。
- 北まるnetについて、データの登録はどの程度の負担になるのか。

【川村教授】

- 基本的には市道を主体としたが、最終的には国道、道道、市町村道でも行いたい。

【布施氏】

- 医療機関で登録入力した人数はわずかしがなく、介護施設はある程度まとまった人数の登録があった。北まるnetに入力することはメリットがあるということを訴え、時間を割いて入力していただいた。
- 問題は、医療機関で基本情報の入力しなければシステムは広がらないこと。電子カルテやレセプトの入力に加え、北まるnetでも入力するという二重入力の課題がある。
- 5年後を目途に、新しいシステムを考えているが、費用をどうするのか。全国的にもなかなか広がらないのは、ランニングコストも含めて捻出する公的裏づけがないことが大きいと感じている。

【庄子構成員】

- 地域性暴風雪ハザードマップの公開について、リアルタイムの状況を知りたいという話があった。
- 徘徊老人検索支援システムを見ると、道路の情報、ボランティアの方の様々な意見がリアルタイムに反映されており、地域性暴風雪ハザードの機能を組み込むことができないだろうか。
- 市民の方たちが知りたい情報を一つにまとめることができないか。一つ一つのシステムを共有化することによって事業の普及を図るということを検討していただきたい。

(全体を通して)

【岡座長】

- 北見市の実証プロジェクトを成功させることで、他地域への横展開も期待

できると感じた。

- このプロジェクトの成功の鍵は、市長の情熱とリーダーシップ、持続性、そして市民の皆さんの参加をどれだけ得られるかである。市民の皆さんに一部費用を負担していただくことが、長続きするポイントである。市民の皆さんの積極的な参加を得られる中身にしていくことが必要と考える。
- ICT利活用において世界一の国を目指すために、障害物があるのであれば、総務省に相談していただくなり、規制が絡むのであれば規制改革を申し出ていただくなりしてほしい。
- 地域活性化の政策は様々あるが、政策実現のためのベースになるのがICTだと感じる。良い街づくりにICTを活用していただきたい。

【藤川総務大臣政務官】

- もし、国交省、厚労省などの規制によって進まないところなどがあれば、我々も対応する。岡座長にお願いすることがあれば、私からもお願いして総理にもつなげるよう努めたいと思う。

以 上